

---

# 死神のシンフォニー

迷音ユウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神のシンフォニー

### 【Nコード】

N3490T

### 【作者名】

迷音ユウ

### 【あらすじ】

唯一の友達が三ヶ月前に自殺した。

無気力に生きる僕は、ある日交通事故にあい、死んでしまう。

死んで僕がたどり着いた場所は『地獄』だった。

しかし、その地獄はイメージとは違った。

自称死神の少女は言った。

「あなたの、生き返りをかけたテストをするよ？」

かくして、僕は生き返りをかけたテストを受けることになる。

自分の生きていた意味を探しながら。

友人が死んだ理由を探しながら。

『アットノベルズに投稿していたものを、大幅修正して、再投稿。』

## 第0話？

彼女は言った。

人はただ、意味もなく生きていく。そりゃあ、生きている時に自分が生きている意味を見つけれたら一番いいよ。でもね、たいていの人間は意味を見つけられないまま、死んでいく。

だからさ、もし、意味のないままの人生を歩んできたって、最後にその人生に意味を見出せたら、最高じゃない？

十

君は、三ヶ月前に死んだ。

僕の唯一の友達だった君は三ヶ月前、その命を自ら絶った。ビルの屋上から飛び降りて。

なんで      とか、そんな理由を三ヶ月経った今、考えても意味はない。

でも、よく考えてしまふ。なんだろう、って。

君が死ぬ直前に、僕の携帯に送られた来たメール。そのメールを見るといつも、そんな考えが浮かんでしまっんだ。

『見つけた』

君が送ってきたメールにはただ、その一言だけが書かれていた。そして、そのメールが送られてきた次の日、僕が通う高校の担任のから電話が来た。

照火くん………。  
しょうか  
雷人くん、  
らいと

昨日の夜……、死んじゃった。

先生いわく飛び降り自殺という。

でも、その自殺はなんとも不思議なものだった。  
遺書がない。

そう、遺書がなかった。普通に墜ちて死んだ。それだけ見れば、何ら事故とも変わりないのに、世間や警察はなぜか、自殺として処理した。もしかしたら、本当は遺書があったのかもしれない。でも、そんなことは知る由もない。  
ただ、あのメールだけがいつも、引っかかる。

見つけた。

何を見つけたというのだろう。  
わからない。  
自殺と何か関係があるのだろうか。  
わからない。

そんなことを考えながら、無気力な毎日を過ごすしていた。

僕、紅照火には、家族というものがいない。

七年前だったと思う。

事故で三人の家族を無くした。

それからというものの、信じられる人間は雷人しかいなくなっていた。彼もまた、僕と同じような境遇の一人だった。

気付くと、友人は雷人しか居なくなっていた。いつも、暗くしているせいか、誰も近づかなかった。クラスのアス的存在である、飛鳥はそんな僕に対してたまに、気付いたように暴力をふるっていた。  
なにも……、悪いことはしてないのに。

僕はクラスでは孤立していた。  
雷人が死んでから、その孤立はいつそう強まった。

僕は学校に行くことをやめた。

意味のない毎日を無気力に過ごした。僕は死んだように生きていた。

リビングの小さなテーブルの上には、充電が切れて死んだような真っ黒の画面の携帯電話が転がっていた。

ふと、窓の外を見る。朝から降り出していた雨はいつそう強くなっていた。アパートの一階にある僕の部屋の窓からは、ただ、塀と塀の内側の小さな小さな庭しか見えない。庭には水溜りがいくつもできていて、どこからか、蛙の鳴き声も聞こえてきた。

ただ、降りしきる雨の音。そんな音の中で、蛙の唧なく声だけが唯一感情のこもった音に聞こえた。

僕はふらっと、部屋から、外に出た。

傘も差さずに。濡れながら。

なんでだろう。

なんで、今日はこんなにも気が沈むのだろう。

三ヶ月も耐えてきたはずなのに、なぜ今日に限って？

何を見るわけでもない。ただ、下を向く。

どこに行くわけでもない。ただ、歩く。歩く。昔の事故で不自由になっていた足を動かしながら。

何分経った・・・？そんなことは知らない。

一瞬雨音が止んだようにも思えた。

耳を劈くような、何かがこすれるような音の音。

それが車のブレーキ音だと気付くのに、少し時間がかかった。

クラクションの音が、少し遅れて聞こえてきたが、ただそれはBGMのように、耳を通り過ぎていった。

顔をあげる。なぜか自分は交差点にいた。

車が迫ってきていた。

本能的に、避けようとする。

しかし、不自由な足が瞬間的に動くはずもない。

車は雨で濡れた路面をすべるようにして、僕のほうに向かってきた。

刹那、全てが止まったように思えた。

気付くと、僕は宙を舞っていた。

どさりと、アスファルトの道路にたたきつけられる。

ザーラーっと、雨の降る音が、思い出したかのように辺りを支配する。

体が……動かない。

いや、体がないようにも思えるその感覚。まるで幽霊にでもなったような……。首は動かせないが、視界の中にある自分の体を見て、安心する。あれ？何を安心してゐるのだろう。

自分の体の周りには、朱色の液体が雨と混ざり、辺りに染み広がっていた。

痛くない。

なんでだろう。でも、そんなことどうでもいい。

車の運転手がやっと停止した車から、飛び出してきた。

薄れ行く意識の中、運転手の声が聞こえてきた。

「おい、大丈夫か！しっかりしろ！くそう……。なんであんなとこにいたんだ」

運転手は携帯を取り出しどこかへ電話をかけていた。おそらく19だろう。

視線を動かし、空を見る。ただただ、灰色のその空は、こころの中を映した鏡みたいで、滑稽だった。

僕はこころの中で笑う。

もうすぐ会えるかな。

「ら．．．．．いと



## 第0話？

2

がたん、と小さくバスが揺れた。

夏季課外研修から帰る途中の高校生が乗ったバス。それに乗って  
いた、不知火飛島しらぬい あすかは、何気なく、窓から外を眺めた。

激しく窓を打ちつける、雨。

それは雫となって、流れていく。

バスの中は、異常なほど、静かだった。それは、このクラスのボ  
スの存在である、飛島への恐怖のためだった。

十

バスの運転手である、大木亮太郎おおきりょうたろうは、この道三十年のベテラン運  
転手。今回も、普段通り運転をする。雨が強いが、そんなことは些  
細なことだ。今までの経験からすれば、問題はない。

いつもと変わらない運転風景。

「ん？なんだ、これは……………」

いきなり視界に霧が現れる。薄いが、本当に唐突に。ここは普通  
の街中の公道。山の中などではない。こんなにいきなり霧が現れる  
ことはまず、ないと言って言いだろう。

しかし、その霧は現れた。何の前触れもなく。

次の瞬間、大木は頭がくらっとするような感覚に襲われた。意識  
が、ほんの少しの間、飛ぶ。

意識が戻る。

霧が晴れる。

はっとなり、前を向く。

交差点。  
信号は赤。

大木は瞬時に状況を把握し、凍りつく。  
交差点までは数十メートルしかない。今のバスの速度、路面の状況からして 止まらない。

交差点の右からは、大型トラック。左からは小型の軽自動車。間に合わない。

大木は顔を引きつらせながら必死にブレーキを、踏んだ。

十

突然の大きなブレーキ音。車体の揺れ。異変に気がついた生徒は、窓から外を見る。

車体はありえない方向に滑っていた。前方の信号は赤。止まりそうな気配はない。バスは、大きな音を振りまきながら、濡れた路面をすべる。

車内のほかの生徒も異変に気づき、車内の静寂は打ち破られ、一瞬にして悲鳴へと変わる。

「おい、どうしたっていうんだ!!」

いまいち状況を把握することができずにいた飛鳥は、座っていた席から立ち上がり、叫んだ。しかし、パニック状態の車内からは返事が返ってくることはなかった。

バスは、横断歩道をゆうゆうと超え、交差点につっこんでいく。

ドグア

。

十

救急車のサイレンの音が、  
煩く響き渡る。

## 第一話？

### 第一話 「test」

1

「うつ、うつ……ここ……は？」

僕は目を開け、寝そべっていた体を起こした。周りを見たが視界に入ってくるものは全て、黒。漆黒に包まれていた。僕はその漆黒の闇の中に、一人横たわっていたらしい。

おかしい。

なにかがおかしい。

なんでこんなところにいるのだろう。

僕は、考える。

そうだ、僕は事故に遭って、それから……それから、どうなった？

事故に遭ったというなら、病院にいるはずだ。今まで、意識がなかったからわからないとはいえ、さすがにあれだけの事故なら病院送りのはず。

僕はふと、自分の体を見た。あれほどの事故だったにも関わらず、どこにも傷はないようだった。事故に遭う以前のまま、きれいなままだ。それと、なんだか体がいつもより軽い気がした。

「そうか……」

僕は考えた末、勝手に一つの結論にたどり着いた。ここは死後の世界なのだと。

「やっぱり、あんな事故だったら死んじゃうよね……。だ」とすると、ここは天国！？いや……。地獄かな……。

「  
そう考えるのが、一番妥当だったとはいえ、やはり、いい気分ではない。」

ぶつぶつと、一人で呟いていると、カッンとすぐ後ろで足音がした。

僕はびくつとなりながらも、振り向く。

「だ、誰………？」

振り向くと、そこにいたのは一人の少女。背は小さかったが、歳は僕と同じぐらいに見えた。ツインテールの髪型が印象的だった。それと、もうひとつ印象が強かったのが、彼女が着ていた服。服装はセーラー服だったのだが、通常のそれとはちがい、色が黒を基調とした配色だった。背景の黒と同化して、境目がわかりにくい。とけこむような色だった。

僕は彼女を見た瞬間、誰かの顔が思い浮かんだ　気がした。

しかし、それが誰なのかはわからなかった。

僕がじつと見ていると、少女は口を開き、元気な声で話し始めた。  
「おどかしちゃった？ごめんね。それは、そうと、ようこそ！『地獄』へ」

少女は流暢にそんなことを言った。

「誰なの………君。それとここはどこ………？」

僕は一步身を引いたような口調で返してしまった。しかし、少女は気にする風もなく、

「わたしの名前は唯。くろはねゆい黒羽唯っていうの。よろしくね。一応これで

も、死神やってます」

唯は小さく笑った。

「しに………がみ　？」

表情には出さなかったが、正直その言葉にビックリした。べつに、信じたわけではない。でも、死神と言う言葉は、きいて気持ちのいい言葉ではないと思う。

僕の中では……、というかたいていの人は、死神「死を招く神」といったイメージはあると思う。

自分の中の死神のイメージを頭に思い浮かべながら、目の前にいる唯と見比べる。

どう見ても、死神には見えない。

色だけのイメージなら合っているが、まず第一に、こんなかわいい女の子を、とても死神と思うことができなかった。

僕は、そんな胡散臭い死神少女に、訊いた。

「死神　には見えないけど、もし仮に君が死神だとしたら、僕に死を招いたのも君だったりするの？」

そんな質問に、唯はしばらく黙って僕のほうを見ていたが、しばらくすると、はあとため息をついた。

「やっぱり、みんな質問するなあ。なんでだろ。やっぱり未練があるからかな。いい？　どうやら現世では、『死神』が『死を招く』みたいに思われてるみたいなんだけど、それは違うんだよ？」

なんだか思考を読まれた気がする。

「人が死ぬのは、『運命』なんだよ。最初から決まってること。わたしたち、死神の役目は死んだ人にテストを受けさせることなんだよ」と、だるそうに言った。

「テスト？」

「うん、テスト」

「テストって何の？」

テストときいてまず思い浮かんだのが、学校であるようなテスト。

「テストっていうのは、君の生き返りをかけたテストだよ。君が、再び現世に戻るかどうかのね。」

「そんなものが……」

「あるんだな」それが

死後の世界のことなど知らなかったとはいえ、そんなものがあるとは驚きだ。でも……、

（僕が生き返ったって……何の意味もない）

「ん〜。それともう一つ質問あったね。なんだっけ……。えっと。あつ、そうそう。ここがどこか、だっけ？」

僕は無言で頷く。

「さっきも言っただけど、ここは本当に地獄だよ？」

やっぱり、ところろの中で呟く。ここが天国といわれたら、少し違和感を感じるが、地獄というなら別に違和感はない。

それにしても、なぜ僕は地獄行きなのだろう。それがどうも納得がいかなかった。

「……。なんで僕は地獄行きなの？ なにも悪いこととかしてないのに……。」

「ああ、そのことなんだけどねー。これも結局は、現世での勝手なイメージ付けなんだけど、どうやら現世では、善いことをした人が天国で、悪いことばっかりをした人が地獄に行く……。みたいに言われてるらしいけど、それは違う」

「え……。？」

「基本的に言うところ、老いて死んだり、未練がない状態　まあ報われた人生を送ってきた人が天国行き。そして、それ以外は全員地獄行き」

「へえ……。？」

「そして、地獄に来た人は、さっき言ったようにテストを受けるの。べつに、辞退もできるんだけど、辞退したら、天国行き、テスト不合格でも天国行きてわけ。そんな、善い人とか悪い人とかそんなことじゃなくて、死後の世界のシステムも意外にそんなもんなんだよ」

唯は笑いながらそんなことを話していた。

そんな話をききながら、僕はふとあることを思い出した。

ここは死後の世界。なら、すでに死んでいる雷人に会えるかもしれない！

「らいと……。、光見雷人<sup>ひかりらいじん</sup>って知らない？三ヶ月ぐらい前に

死んだんだけど」

「雷人……？あー知ってるよ。わたし、ちょっと前に担当だったから」

「じゃあ、雷人、今、どこにいるか知らない？会いたいんだけど……」

僕がそう言うと、唯は顔を少し下に向けた。

「雷人は……地獄には来たけど、テストを受けなかったの。だから、多分今は天国に……」

「そ、そんな……」

なぜ、生き返れるかどうかのテストを断ったのだろう。わからない。雷人の死について、ぼくは何も知らなかったから。

でも、ひとつ希望は残されていた。それは、天国。テストを辞退したら、天国に行くという。なら、同じようにテストを辞退して、天国にいけば、雷人に会えるかもしれない。

「ねえ……あの……僕も今から受けるテスト、辞退していいかな。それで、天国に行って雷人に会えるなら、それでいいから……」

しかし、唯は首を横に振った。

「テストを受けないのは個人の自由だから、べつにかまわないんだけど、合える可能性は保障できないよ。ていうか、ほぼ0。一口に天国といたって、たくさんあるの。その数は無数といってもいいかも。だから、天国に行っても特定の人と会うことなんか、まず不可能。しかも、天国にその人の魂がいられるのは、ほんのわずかな時間。時間が経つと、魂から人格が消えて、新しい魂となって、また、現世へ行ってしまふから……。消えるまでの時間はラダムだから……。なんともいえない」

「……」

（じゃあ、もう雷人には……会えない……）

そんなこと、雷人が死んだときからわかっていることなのに、いまさらなのに、なんだかとても寂しかった。



ぼくは、ただ無言のまま俯いてしまった。

そんな僕を見るに見かねたのか、唯はハアと大きくため息をついて、

「ホラホラ！そんなに暗くならない！！テスト、一応だめもとでも受けといたら？なにもしないで、だめになるより、なにかしたほうがいいと思わない？」

そう言つて、僕の背中をバンとたたいた。

たしかにそうだ。

わかつているそんなこと。

現実から逃げるのは楽だ。しかし、逃げてちゃんにも始まらないわかつている。そんなこと。でも、僕は勇気が出ずにいた。

それでも、なんとか首を縦に振った。何でそうしたのはわからない。

僕が、頷くと唯はにこりと笑った。

それは、どこかで見たような笑顔だった。

「んじゃ、しょうか照火。テスト会場に案内するよ？すぐ着くから」

唯は僕の手を引っ張って、歩き出した。

唯の手の感触がじかに伝わってくる。

なんだか、

冷たい感じがした。

## 第一話？

2

(・・・・・・遠い)

歩き始めてかれこれ四十分が経っていた。唯ゆいは近いといっていたのだが・・・。。。。。。歩きで四十分は近いといえるのだろうか。

「唯・・・。。。。。。まだ着かないの？」

もともと体力の無い僕は、すっかり疲れきっていた。うなだれていた首をなんとかあげ、唯のほうを見る。      と、唯はきよろきよろと辺りを見回しながら歩いていた。

「もしかして・・・。。。。。。迷った？」

まあ、この漆黒の中、方向などわかりはしないのだが・・・。。。。。。案内するといった手前、道はわかつているはずだ。でも、どう見ても、今の唯は迷っているようにしか見えない。しかし、そんな唯の姿を見ていると、なぜかそれが唯という少女として当たり前のような気がしてきた。

「そ、そんなわけないじゃん。ほっ、ほら。あそこだよ」

唯はなんだか焦りながら、前方を指差した。

僕はその指差されたほうに目をやった。

「うつ、」

しかし、僕は咄嗟に目を両腕で覆い隠した。結いが指差したそこから先は、今までの漆黒とは違ってかわり、明るくなっている。突然の光の変化はとてもまぶしく思えた。

なんとか、腕と腕の隙間から、前を見る。

そこは、学校だった。

手前に校庭があり、その奥には大きな三階建ての校舎がある。校舎につながるようにして、右奥には体育館らしきものもあった。

「なんで、こんなところに学校が……」

僕は唯にそう問い掛けた。しかし、唯はそれを僕の独り言と思ったのか、スルーした。

「うわあ、久しぶりだなあ、この『ステージ』。一年ぶりかも」

唯はそう言いながら、すたすたと先に歩いていく。

「どうしたの？ 照火<sup>しょうか</sup>。早く行くよ」

「あ、……うん」

「ほら、急いで」

唯はどんどん歩いていく。僕は走って、なんとか追いついた。

広い広い校庭も終わり、校舎の入り口　昇降口まで来た。ガラス張りの大きなドアを開け、校舎へと入る。

校舎の中に入ると、まず大きなフロアがあった。とても広い空間。そこで、ふと違和感を覚えた。

なんだか　広すぎる気がする。その大きなフロア、そこからつながる長い廊下。どう見ても、外から見た校舎の大きさと、中の床面積がつりあっていない。

首をかしげていた僕を横目に見ながら、唯は、

「じゃあ、照火は十三階の3-A×っていう教室に行つて、待機してて。十三階まではエレベーターを使えば楽だよ」と言い残して、どこかへ行ってしまった。

一人取り残された僕は、再び首をかしげた。

外から見たら三階建てだったのに……十三階だって？

十

僕は、長く広い廊下を一人で歩いていった。エレベーターはその廊下を歩いて行つた、ちょうど突き当たりにあった。

しかし、エレベーターまでたどりついたのはよかったのだが、僕はあることに気付いた。

普通、どんなエレベーターにもある、『ボタンがない。変わりに、ボタンがあるべき壁には、こんな張り紙がしてあった。

『行きたいクラス番号を叫んでね 叫ばないと、エレベーターの扉は永遠にあかないぞ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだこれ・・・・・・・・とか思いつつ、エレベーターの扉を探ってみた。やはり、開く様子はない。どうやら、本当に叫ばないといけないようだ。

叫ぶのは恥ずかしいが、そうしないと開かないならしかたがない。べつにまわりには誰もいないし・・・・・・・・。

僕は覚悟を決めて叫んだ。

「3 - A x ! !                      これでいいのかな・・・・・・・・」

エレベーターのほうをじっと見ていると、ヒュンという音がしたあと、扉が開いた。どんな仕組みになっているんだろう・・・・・・・・。そんなことを考えながら、エレベーターに乗り込む。

エレベーターの中は本当にシンプルで、これまた、ボタンすらなかった。少し焦りながら、きよろきよろと視線を惑わしていると、勝手に扉が閉まり、動き始めた。どうやら上に向かっているようだ。つた。

ドアが開いた場所は、ちょうど十三階だった。

「えーと・・・・・・・・。3 - A x くてどこだろ・・・・・・・・」

エレベーターを出てすぐの教室のドアの上にあるプレートには、3 - A aと書かれていた。3 - A xはもう少し奥だろう。

長い何の特徴もない廊下を歩く。白一色で固められた廊下は、目が痛くなるほどまぶしい。

ここは、学校というよりも、マンションに近かった。教室の数は

とても多い。それと、教室の間隔が狭いせいか、マンションの一室に見える。

廊下を、五十メートルほど進んだところに、その教室      3 - A  
Xはあった。

ガラガラ。

ドアを開け、中へ入る。普通の教室。机が二十程度置かれていて、どっちかというと狭い。

教室・・・・・・・・か。

久々に教室というものを見た気がする。

・・・・・・・・。

ドアのところに突っ立っていると、黒板の上に設置されていたスピーカーから、声が聞こえてきた。

『ほら！そのぼさつと突っ立っている少年もとい、照火。早く席に座ってよ。一番奥の席だから、はやくう』

唯の声だった。

さっきどこかへ行ったのはこれのためだったのか。

僕は指定された席へゆつくりと座った。それと同時に、再びスピーカーから声が聞こえてきた。

『はい。それっじゃ、みんなそろったようなので、第一次試験をはじめね』

みんな・・・・・・・・？

みんなといってもこの教室には、僕一人しかない。

疑問に思っていると、唯が付け足すように、

『あーっ。一つ言っとくけど、この教室にいる人は、自分以外の人  
の姿は見えないから。もちろん声もね』

なるほど、それなら納得だ。

『じゃあ、机の中に入ってる筆記具と、プリントを取り出してくださーい』

僕は、机の中を手でまさぐった。そこには一枚の紙とシャープペンシルと、消しゴムが入っていた。

（筆記テスト・・・・・・？）

まさか、と思いながら、そのプリントを見た。

そこには文字がびっしりと印刷されていた。どうやら、テストというよりは、アンケートのようだった。それにしても量がすさまじい。

表の問題の最後の番号が「No.250」。まさか、裏も・・・・と、裏を見てみたが、案の定裏にもびっしり。

結局、合計六百の質問があった。

アンケートとはいえ、一気にやる気がうせた。

とはいえ、これをやらなければ何も始まらない。僕はなんとか書き始めようとする。と、ちょうどそんな時、

『すみませーん。言い忘れそうになってましたー。見ての通り、一次試験はアンケートです。アンケートの問いには、自分を偽ることの内容正直に答えてくださいね。ちなみに、全質問の内、はじめのほうの七十パーセント　ようするに、四百二十問は全員共通の問題。残りの百八十もんは個人個人違う質問となっております。あと、この試験からリタイアしたい時は、この教室から退室してください。担当のものがすぐ行きます。それじゃあ、みんな頑張ってね』

放送はそう言うのと、途切れた。

僕は、唯の言った言葉を反芻する。はじめの四百二十問が共通。

そして、残りの百八十問が個人個人の質問。どんな質問があるのだろうか。

考えてもしようがないので、僕はアンケートに取り組むことにする。

【No.001:あなたが死亡したのはいつですか。（不明な場合

はとばしてもよい)】

と、いきなり思い出したくもないこと。．．．．．死んだ日。  
あれはたしか．．．．．あの気がとても沈んでいた日。  
いつだっただろうか。

そうだ、おもいだした八月九日。もしかしたら、車に轢かれてから、死ぬまでに時間があつたかもしれないが、そんなことは知らない。

僕は八月九日と紙に書きかけてふと、思い出した。

(あの日．．．．．僕．．．．．雷人の．．．．．  
誕生日だったんだ．．．．．)

一門目から、三十問目までは、死んだことや、死ぬ直前のことに  
関する質問ばかりだった。まあ、それからあとは、趣味を聞いたり  
と、どこにでもある、テンプレートの質問ばかりだった。

どれぐらいの時間が経つただろう。もともと、書くスピードが遅  
いのでここまで結構時間がかかってしまった。四百二十問。ここま  
でが共通の問題。次からが、個人への質問。

【No．421：生前（死ぬ直前）、あなたには何人の友達がいま  
したか？】

なんだか、心が痛むような感じがした。

【No．423：生前（死ぬ直前）、あなたには何人の家族がいま  
したか？】

【No．435：生前、何回人の死と出会いましたか？】

【No．451：あなたのことを信じてくれる人はいましたか？】

【No.452：あなたが信じることのできる人はいましたか？】

【No.499：あなたは人を助けるようなことをしたことがありますか？】

【No.504：あなたは、何もできずにただ、立ち尽くしたことはありませんか？】

シャープペンを動かす速度が、だんだんと遅くなっていく。

その質問は、封じ込めた傷をついてくる。

バンソウコウをはがすように。

【No.513：あなたの親友、光見雷人さんが、自殺した理由をあなたは知っていますか？】

質問はただ静かに、冷淡に、しかし確実に、もろい部分を突き崩していく。

自殺した理由だって……？そんなの、知らない。知らない。知らない……？……いや、なにを知っている？僕は………。

何かを知っている？

頭が痛くなってきた。

解答欄には何も書かない。

その後の質問も、容赦なく攻撃をしてくる。

そして、いよいよ、最終質問。

【No.600：あなたが今望むことは何ですか？】

望む　　こと？



僕は、所々空欄がある紙を空ろに見ながら、シャープペンを置いた。

『はい。みんな終わったみたいだねー。えーと残ったのは一、二、三……六人かあ。結構少ないなあ。まあいいか。それじゃあ、続いて二次試験にうつりまーす。皆さんはそのまま、担当の死神に聞いて、視聴覚室まで行ってくださいーい。それでは』  
放送はぶつりと途切れる。

もともと、何人いたのかは知らないが、机の数からして、二十人前後はいたのだろう。しかし、今は六人しかないらしい。十四人ほどリタイアしたということ。おそらく、あのアンケートに耐えられなくなつて。もちろん、ほかの人の質問内容は知らない。知りたいたとも思わない。でも、僕のそれと同じような内容だったにちがいない。

僕はしばらくの間席をたてずにいた。

ガラガラ。

ドアが開き、唯が教室に入ってきた。

「あれ、なにしてるの？早く行かないと、二次試験、始まっちゃうよ」

「……………」

あのアンケートは誰が作ったのだろう。

「……つたの？あのアンケートは誰が作ったんだよ！」

僕は、声を少し荒げていった。あのアンケートは、どう考えても心を折るためのものとしか考えられない。もし、質問を作った奴に

会ったら、すぐにでも殴りたい気分だ。

しかし、唯の答えは意外なものだった。

「あのアンケートの最初の四百二十問はともかく、後の百八十問を作ったのは、照火自身だよ？」

「え？」

虚をついたような答え。

「あのアンケート用紙はね、特殊なの」

唯は、教室の黒板の前にある、教卓のほうへ歩いていった。教卓の中を探ると、僕たちが使ったのと同じアンケート用紙があった。しかし、何も書かれていない。唯はその紙に触れる。すると、その紙にすつ、と文字が浮かび上がってきた。

「この紙にはね、ある死神の『力』がこめられてるんだ。触った人の『こころ』、『記憶』に強制介入して、その中から、その人が一番触れられたくないものを抜き出す。そして、質問を自動作成するってわけ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『力』というものがなになのかは知らない。しかし、なぜあんな質問があつたかは分かった。・・・なるほど。だからあのアンケートには、他人が絶対知りえないような質問もあつたのか。納得し

、いや、できるはずがない。こんなシステムを作った奴は、人のこころをなんだと思っているのだろう。人の記憶　思い出をなんだと思っているのだろう。そんな、せつかく封じ込めてきたものを、引き出しておもしろいのだろうか・・・・・・・・。

「さあさあ、黙り込んでないで。行こ？」

唯は、僕の考えていることなんて、気付きもせず、手を無理やり引っ張っていった。

## 第一話？

3

手を引つ張られながら歩いている間、僕はなぜか、自分の過去のことを思い出してしまっていた。

僕の家族は、もともと、両親と、妹の琴音<sup>ことね</sup>、そして自分を合わせた四人家族だった。

でも、七年前の夏。九歳の時のことだった。

夏休み。僕は、家族で旅行に行った。はじめて行った、東京デイズ<sup>ズ</sup>ニerland。とても楽しかった。家族四人で、二泊三日を満喫した。

だが、それは、その帰りに起きてしまった

帰りの車の中。楽しい思い出をいっぱい持って家に帰る途中のことだった。

対向車線を走っていた車が、中央分離帯を飛び越えて、こちらの車線に突っ込んできた。そして、事故は起きた。

一瞬だった。

僕は生と死の間を三週間も彷徨っていたらしい。

目覚めた時には、何もかもを失っていた。

自分を愛してくれた母親。あんなに優しく、憧れだった父親。

そして、僕の事をとてたよりにしてくれて、慕ってくれていた琴音。全て失っていた。

もう二度と帰ってこない。

誰が悪いのか。

後からきいた話だが、事故の相手の運転手は飲酒運転をしていたらしい。そして、その運転手もその事故で死んでいた。

誰を恨めばいいのか。

相手の車の運転手……？      でも、死んでしまった人を恨んでもしょうがない。

それとも、こんな残酷な運命を作り出した神様？      でも、神様を恨むというのはお門違いだろう。

誰を恨もうと、何を恨もうと、一度失ったものは、もう二度と帰ってこない。それが、当たり前。その時僕は、他人を恨まないかわりに、自分を恨んだ。なんで僕だけ……。なんで……。僕一人だけ生き残ったのか……。なんで、みんなと一緒に、死ねなかったのか……。

人間は、己に不幸が襲い掛かった時、誰か、他人を恨むことで、その不幸を紛らわそうとする。僕はそれができなかった。僕のところにあいた、大きなあな。深い傷跡。それらはなかなか癒えることはなかった。

僕はその事故で特に足に大きなダメージを負っていた。まあ、あれだけの事故でこの程度の損傷ですんだのは奇跡的だ、と病院の先生が言っていた。幸い、昨今の医療技術の進歩のおかげで、足の切断は免れたが、そのリハビリは、相当きついものだった。

つらいリハビリの中、こころの支えもない、そんな状況で僕はあ  
る一人に出会う。

それが、光見雷人だった。

雷人と僕は、いろいろと似ていた。雷人も僕と同じように交通事故に遭い、家族を失い、足に怪我をおっていた。そんな雷人と僕は、

みように息があつた。

雷人は事故の所為で、のどをやられ声が出なくなっていたのだが、一緒にリハビリをしていく中で、どんどん心が通じ合うようになっていった。まさに以心伝心だった。

病院から退院するのもほぼ同時期だった。家が比較的近いことを知ってからはよく遊びにいった。小学校は違ったが、中学校は同じ私立中学を受験し、同じ学校へ行つた。これから僕たちは楽しい学校生活を送っていく『はず』だった。はずだったのだが、それは叶わなかった。二人には地獄が待ち受けていた。

それは、拒絶というのな地獄。

なぜかはわからない。僕たち二人は、クラスメイト全員から拒絶されていた。隔絶といつてもいい。正確に言えば、拒絶されていたのは雷人のほうだった。理由はもちろんわからない。

そして、そんな毎日が過ぎ、ある日クラスのボスの存在だった不知火飛島が僕に向かって暴力を振りはじめた。最初は殴る程度だったのだが、だんだん度合いが増し、しまいには仲間らしき生徒を三人ほど連れてきて、一緒に暴力を振っていた。

それでも僕は学校に通っていた。

雷人も。

雷人は、拒絶のことは気にしていないようだった。いつものまま、ただ休み時間に僕と話す。そんな毎日。不思議と、飛島は雷人には暴力は振るわなかった。「飛島」は。飛島の周りにいた奴らは、雷人にも暴力を振っていた。しゃべれないことをいいことに、下手すると僕に対してよりもひどく。僕は、暴力を振るわれている雷人を前にしても、何をすることもできなかった。

数ヶ月。雷人は学校に来なくなった。

僕は学校から帰るといつも、雷人の家に行った。誰もいないガランとした家。

雷人は家にいるときはとても、とても明るかった。

ある日雷人はこんなことを言っていた（言っていたといっても、声は出ないので筆談だが）。

「（べつに僕は暴力のことなんて気にしてないんだよ。それにね照火。僕には何もしてこないけど、飛島くん。なんかいつも寂しそうな顔してるんだよ。なんなんだろうね。暴力を振りたいなら振ればいい。拒絶したいなら、どうぞご勝手に感じて。僕はね今、を探してるんだ。だからそんなことされても、何にも関係ない。ただ、を探すことに必死だから。」

……のことは思い出せなかった。何を探しているかは。

今思えば、あのメールはこのことなのかもしれない。

『見つけた』

というメール。

そう、あのメールを残して、雷人は墜ちた。

雷人は

ねえ、ねえってば。おい「照火」。着いたよ？ 顔色悪いけどどうしたの？ 死にそうな顔してたよ？ まあもう死んでるけどね（笑）」

唯の声で、僕ははつとなった。どうやらいつのまにか視聴覚室に着いていたようだ。唯は、ずっとうつむいていたらしい僕のほうを、怪訝そうに見ている。

僕は何とか、表情を戻す。

「な、なんでもないよ」

相当、分かりやすいつくり笑顔になっていたと思うが、唯は気にする風もなく、

「ま、いいけど。ほらここが視聴覚室だよ」

僕は、前を見た。

「ここが……」

扉を開け中へ入る。予想と反し、特に機械類は置いてない。不思議

議なことに、部屋の中にさらにたくさんの個室がある。

「なに、こっ」

「ん？視聴覚室だけど？さあさあ、あの0809ってかかっている小部屋に入って」

唯は僕の背中を押し、無理やり部屋へと押し込んだ。

「ちよ、ここだなにするんだよ」

「だいじょうぶ。怖がらないで。気を強くもつとかないと、帰れなくなっちゃうよ？」

「ど、どういう……」

逆に怖くなるようなセリフをいうと、唯が小部屋の扉を閉めた。

僕は咄嗟に開けようとするが開かない。

「と、閉じ込められた？そういえば今から二次試験のはずだよね……。これが……？」

なにが始まるのだろうか……。そう考え始めた刹那、ぱちつと部屋全体が強くフラッシュした。

「うわあああああああ！」

意識が

飛んだ。

僕は気絶した。

## 簡単キャラクター紹介？

紅 照火 くれないしょうか

主人公

光見 雷人 こうみらいと

照火の友人。三ヶ月前に飛び降り自殺をして、死亡。

不知火 飛鳥 しらぬいあすか

照火のクラスメイト。クラスのボスの存在で、時折照火に暴力をふっていた。

大木 亮太郎 おおきりょうたろう

照火の通う学校の専属運転手。この先も登場します（w

黒羽 唯 くろばねゆい

死神。照火の担当。

紅 琴音 くれないことね

照火の妹。七年前の事故で死ぬ。本編では多分、もうでません。



## 第二話？

ふいに肩をたたかれた。

僕ははつとなり振り向く。

そこにいたのは、雷人<sup>らいと</sup>だった。

「あ、雷人。えーと．．．．．あれ？今、僕何してたんだっけ」  
雷人は口を動かす。昔の事故のせいで声は出ないが、僕はそれで十分、読唇<sup>どくしん</sup>ができるようになった。

「（なんだか、いきなりボーっとしてたんだよ。大丈夫？立ち眩みか何かじゃない？）」

「え．．．．．ああ．．．．．」

雷人は何をしていたかまでは言ってくれなかった。

ボーっとしていた？それより前は何をしていたんだっけ。  
思い出そうとすると頭が痛くなった。

「（大丈夫？）」

「あー、うん。大丈夫。ていうか、今何時だっけ．．．．．」

僕はポケットから携帯を取り出し、メイン画面に表示されている、日時を見る。

/ 5 / 7    16 : 32

「あれ．．．．．？」

何かがおかしいと思った。

それが何かはわからない。でも、確かに違和感を感じた。

「（どうしたの？）」

雷人はそんな僕を見て、首をかしげている。

「（具合、悪いの？）」

「いや、大丈夫だって。心配ないよ」

「（ならいいけど。あ、もう少ししたら病院の時間だよ。そろそろ

行こうよ)」

「え、ああ、うん。そうだね」

病院……。そういえばそうだ。僕は今、病院の検査に向かっている途中だったんだ。

あの事故のときから、僕も雷人も足が不自由で、定期的に検査を行っている。今日がその日。

「ごめん。なんかボーっとしちゃって。んじゃ、いこうか」

十

「うん、大丈夫だね。特に問題はないようだ。雷人君のほうも大丈夫だよ」

宮迫先生は僕たちに微笑みながら言った。僕たちの主治医、宮迫先生は長い仙人のようなあごひげが特徴のベテランの医師だ。

「ありがとうございます。じゃあ、今日はもうこれで帰っていいですね？」

「うん。大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

「（ありがとうございます）」

僕たちはイスから立ち上がり、診察室から出て行こうとした。

「あ、ちょっと二人とも」

ふいに、大迫先生に呼び止められた。

僕は振り返りながら、

「なんですか？」

「その足。その足の怪我はどうしたんだい？どうやら打ち身のようにだけど」

大迫先生は僕たちの足を指差した。

僕は左足、雷人は右足。大きな打撲痕。ちょうど内出血している状態。

「あ、いえなんでもないですよ。ちょっと打っただけですから」

僕の言葉に、雷人も大きく頷いた。

「ふーん。ならいいんだけどね。なんかちょっと気になったただけけど……。それしても、二人とも同じようなところに、同じような怪我って、やっぱ二人気が合うつていうか……。なんだろうねえ」

大迫先生は苦笑いをしながらそう言った。

僕たちは作り笑いで返ししながら、診察室をでた。

夕闇が迫ってきていた。

「（怪我、先生に見られちゃったね）」

「だね。でも、まあ気付かれてないから大丈夫じゃない？」

僕たちはそれっきり黙りこんだ。

気付かれていないから……。本当は 気付いて欲しい。  
でも、。

僕たちは駄菓子屋のある、交差点でわかれた。辺りはもうすっかり暗くなっていた。

僕は右の道。雷人は左の道。

「また明日」

僕がそう言うと、雷人は手を振り返してきた。

雷人の姿が次第に闇の中へと消えていく。

家の近くまで帰ってきたところで、僕の目にはいやなものが飛び込んできた。

「あれ、照火君しょうかじゃないですか。こんな遅くまで何してるんですか

あ？」

「いやみにしか聞こえないこの台詞を言っているのは、僕と同じくラスの速<sup>はや</sup>。」

速は僕のほうへ近づいてくる。そして、ガシッと、僕の首に手を回した。

「ちよつとさあ、たのみがあるんだよねえ。聞いてくれるかなあ。聞いてくれるよね？」

速は、腕に力をこめた。首が絞まる。息はぎりぎりできるが苦しい。

「うう……。な、なに……。」

僕は何とか声を出す。反応しないと、何をされるかも分からない。「いやさあ。ちよつと今からさあ、飛島たちと遊びに行きたいんだ。でもさあ、俺ってば昨日金使い果たしちゃってさあ……あほだよなあ」

速水はククク、と小さく笑った。……あれ？この感じどこかで。

「このままじゃさあ。遊びにいけないジャン？だからさ少し金を分けてくれよ」

さらに力がこめられる。

「わ、わか……つ、だから。ちよ……つと、いったん、手を……。」

「はあ？なにいつてるんですかあ？俺耳悪いから聞こえないんですけど？」

さらに力が強くなる。さすがに息が苦しくなってきた。

僕は、必死の思いで、ポケットに手を入れ、財布を放り出した。

「お、ありがと。ぜんぶくれるのか？」

速は手を離し、僕の財布を拾った。財布を開け、中身を確認する。「お、一万も入ってるジャン。これもらってくな」

速は、財布から一万円札を抜き出すと、財布を僕のほうへ投げた。「さすが、俺の『友達』。ありがとくな」

速は、笑いながら、小走りで去った。

なにか友達だ。

まあ、一万円はとられたが、財布だけでも帰ってきたのは、良かった。財布の中には、いろいろ大事なものが入っていた。

僕は、特に何も言わずに、自分の家に入った。もう慣れてしまつて、何も言うことも、思うこともできない。麻痺してる。

何もする気が起きなかった。夕飯も食べてないが、とても食べる気にならなかった。

僕はそのまま布団に入った。

そういえば、さっき速に金を取られたとき、なんだかまた違和感を感じた。これは、デジャヴ？前にも同じようなことがあったような気がしてならない。でも、思い出そうとすると、やはり頭が痛くなる。思い出すのは諦めた。

もう何も考えないことにしよう。

僕は寝ることにした。来ても欲しくないのに来る明日が少しでもいいものになるように願いながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3490t/>

---

死神のシンフォニー

2011年5月23日18時40分発行